

【e-ポスター発表】

児童養護施設における大学等進学支援の対応に関する研究

—施設職員への質問紙調査による—

○ユマニテク短期大学 平松 喜代江 (6444)

中部学院大学 堅田 明義 (9518)

キーワード：児童養護施設，大学等進学，施設職員

1. 研究目的

厚生労働省(2017)によると児童養護施設在籍児(以下、「施設児」)の大学等(専修学校を含む)の進学率は24.0%で、一般家庭74.1%に比べて極めて低い進学率である。このような進路状況について早川(2013)は、一般家庭との格差だけではなく施設間格差が顕著で、特に義務教育終了後に一層顕著になると指摘している。このことは、義務教育修了を境に「自己責任」が大きく問われ、高等学校に進学できない施設児、進学しても中退する施設児、施設生活に順応できない施設児に対しては、18歳に満たなくても「社会的自立」を強いる施設がある一方で、様々な奨学金制度を駆使して、高等学校卒業後の上位校進学についても一般水準以上に実現している施設もあると述べている。こうした施設ごとの「支援格差」は、その後の施設児の人生を大きく分かつと指摘している。そこで、本研究では、児童養護施設における大学等進学支援の対応に関して検討することにした。

2. 研究の視点および方法

調査協力者 「大学等助成制度説明会」(以下、「説明会」)に参加し調査協力に同意した児童養護施設等の職員(以下、「施設職員」)27名を調査協力者とした。性別は、男性5人、女性20人、性別無回答が2人であった。

調査時期 調査は2017年6月に実施した。

調査手順 「説明会」開催前に参加者全員に対して、質問紙調査用紙及び調査の趣旨や配慮などを記した説明書を配布し、口頭で質問紙調査の趣旨を説明した。なお調査への協力は自由であることも述べた。質問紙調査は無記名とし、調査の質問に対する回答は選択及び記述の形式を用いた。質問紙の回収は、会場の後部に回収箱を設置し投函してもらった。質問紙配布数は52部、回収数は27部(回収率51.9%)であった。

調査内容 質問紙調査は、勤務先施設における大学等進学者数および大学等進学支援の対応に関連した8項目により構成した(表1)。

調査結果の処理 得られた回答を項目ごとにExcelへ入力し、一覧表を作成した。選択式の設問は集計を行い、記述式の設問で得られた回答はKJ法を用いてグループ化した。

表 1. 質問項目

①勤務先の施設での高校進学率はおよそのぐらいですか。
②昨年の大学等への進学者は何名ですか。
③過去に、大学等進学を希望したが実現しなかったケースはありましたか。
④過去に、大学等進学を希望していなかったが勧めたケースはありましたか。
⑤高校生への進路に関する支援で気をつけていることはありますか。
⑥大学等進学に向けて、どのような支援をしていますか。
⑦大学等進学の支援に向けて、どのようにして情報を収集していますか。
⑧施設から大学等へ進学した子どもたちと連絡をとっていますか。

3. 倫理的配慮

調査は日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守した。調査に際しては開始前に配布した上記の説明書により口頭にて調査の趣旨を説明するとともにプライバシー保護を遵守し、研究目的以外で調査結果を利用しないことを説明し承諾を得た。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。本研究は中部学院大学倫理審査委員会（受付番号：E16-0018）の承認を得た。

4. 研究結果

(1) 大学等進学者数と進学支援に関する回答内容

本調査結果による児童養護施設における大学等進学者数は、進学者数 2 名(2 施設), 1 名(8 施設), 0 名(12 施設), 無回答(5 施設)であった。したがって、大学等進学者がいる施設は 10 施設(37.0%), いないまたは無回答の施設は 17 施設(63.0%)であった。このことは、先行文献の指摘のように施設間の差が顕著であることがあらためて確認できたと言える。

表 2 には進学支援に関する回答について大学等進学者数別に示した。なお、調査協力者の回答の引用は『 』で表し、調査協力者は通し番号(No)で示した。

進学者のいる施設の進学等に関する回答では、『施設入所児にしては多い』(No. 27), 『全ての卒院生が希望を叶える事ができているから』(No. 16)であった。

一方、進学者の有無と関係なく回答した内容については、経済面の不安(11 件: No, 14, 21, 25, 3, 4, 6, 7, 8, 15, 17, 23), 自分のやりたいことがわからなく希望をもてないような精神面の不安(4 件: No, 24, 4, 6, 7), 学力面の不足(3 件: No. 20, 8, 223), 生活面の不安(2 件: No, 3, 7)と大きく 4 つに分類された。このうち、少数ではあるが、『発達障がいを抱える子どもの入所が増加している』(No, 20)『特別支援の子どもが多かった』(No, 22)との回答が得られた。このようなケースの場合、どのような退所後の生活および就業に対する支援が行われているのか興味深い。

また、施設(No. 14)は、『高卒就職の給料が少ない』ことを指摘し、『将来のことや時代の流れ』を考慮した対応が捉えられた。

これらから、経済的に不安定な子どもだけではなく、障がいを抱えている子どもや学力に課題を抱えている子ども、自分の将来に希望をもてない子どもが入所しているとみられ、

大学進学支援だけでなく、様々な支援の必要性があるとみられる。

表2. 大学等進学者数別に整理した支援等に関する回答

No.	進学者数(人)	支 援 内 容
14	2	・高卒就職の給料が少ない ・将来の事を考えた ・時代の流れ
27	2	・施設入所児にしては多い ・施設入所児の場合、進学率は20数パーセントな為
9	1	無回答
11	1	無回答
16	1	・全ての卒院生が希望を叶える事ができているから
20	1	・学習面に課題がある ・発達障がいを抱える子どもの入所増加のため
21	1	・親から支援もないため
22	1	・昨年は、特別支援の子どもが多かったため ・自衛官になる子が2人いたため
24	1	・自分は何がやりたいのかをわかっていないため ・自分で決められないため ・先の見通しが持てないため
25	1	・金銭的に厳しいのが現状であるため支援あり気でないと感じ
1	0	無回答
2	0	無回答
3	0	・大学に行く費用が準備できない ・1人暮らしして学校に行くのに不安があるから(子ども、職員共に)
4	0	・子ども達に進学の意志がないから ・意志があっても費用面の問題でまずは就職を選ぶ子が多い
5	0	無回答
6	0	・本人の希望もあるが経済的な支援が得られないため ・明確な夢をもっていなかったため
7	0	・経済的理由と子ども自身進学を希望しないケースもあるため ・住居の件等、困難なことが多く進学を希望につながりにくい ・情報の不足
8	0	・学力不足(そもそも進学中心の高校に進学していない) ・周囲の子も就職するから ・経済的理由
12	0	・これまでに、対象者がいなかった
15	0	・勉強するより、働いてお金がほしいから ・施設を早く出たいから
17	0	・金銭面(返済型の奨学金はローンであり、仕事に就けるかも含め就職後の返済に不安)
19	0	・施設が閉所し、今年初めて進学者が出たため
10	無回答	無回答
13	無回答	無回答
18	無回答	無回答
23	無回答	・学力のある子は公立に進学できますが、私立は金銭面で厳しいため、ある程度の力がある子も進学をあきらめている
26	無回答	無回答

(2) 大学等進学を希望したが、実現しなかった事例に関する回答内容

表3に示した大学等進学を希望したが、実現しなかった事例は12件(No. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 11, 13, 17, 23, 25: 44.4%)であった。その回答(複数回答)として、経済面(10件: No. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 11, 13, 17, 23)、学力の不足(3件: No. 3, 9, 23)が主にあげられた。経済面の具体的な理由には、『学費等の費用工面が出来なかったため、本人もまずは就職して費用を貯めて進学すると決めた。』(No. 4)、『保護者からの支援が一切なく、金銭的に難しかった。また、その子自身にも学業、バイト、自炊をやり抜く自信もなかったため。』(No. 5)、『経済的な支援が得られなかったこと、施設自体が進学を後押しする風潮ではなかったこと』(No. 6)、『子ども本人の学費等の経済的な理由に進学後中退せざるをえなくなった。』(No. 7)などが

示された。進学希望があつたにもかかわらず、親や施設等からの支援が得られず進学を諦めざるを得なかつたことが分かつた。つぎに、学力の不足を理由とした具体例としては、『大学に行きたいと希望があつても元々、現実とのギャップがあり、そこを埋めることが大変であつた為』(No. 9), 『医療系・看護系を希望する子が多いが、公立四年制大学を目指すのは学力的に厳しく、私立四年制は経済的に無理であるため、三年制専門にランクダウンする例がいくつかあつた』(No. 23)が示された。ここでは、学力不足の問題だけではなく、No. 23のように学力不足と経済面の問題が重なり合つて希望が実現できなかつたことが分かつた。この結果から、実現には至らなかつたが、大学等進学を希望している子どもが施設に多数いることが分かつた。

表3. 大学等進学を希望したが実現しなかつたとする回答(理由)

No.	実現しなかつた事例の有無	理由
1	無	無
2	有	経済的理由、お金が工面出来なかつた
3	有	学力不足、大学費用の不足
4	有	学費等の費用工面が出来なかつたため、本人もまずは就職して費用を貯めて進学すると決めた
5	有	保護者からの支援が一切なく、金銭的に難しかつたこと、その子自身にも学業、バイト、自炊をやり抜く自信もなかつた為
6	有	経済的な支援が得られなかつたこと、施設自体が進学を後押しする風潮ではなかつたこと
7	有	子ども本人の学費等の経済的な理由に進学後中退せざるをえなくなつた
8	無	無
9	有	大学に行きたいと希望があつても元々、現実とのギャップがあり、そこを埋めることが大変であつた為
10	無回答	無回答
11	有	進学を試みたが経済的な問題をのりこえる意思がなかつた
12	無回答	無回答
13	有	金銭的な負担(お金が用意できなかつた)
14	無	無
15	無	無
16	無	無
17	有	専門学校に入学したものの課題の提出とバイトの両立ができず学費の為に奨学金に手をつけて進級できず退学
18	無回答	無回答
19	無回答	無回答
20	無	無
21	無	無
22	無	無
23	有	医療系・看護系を希望する子が多いが、公立四年制大学を目指すのは学力的に厳しく、私立四年制は経済的に無理であるため、三年制専門にランクダウンする例がいくつかあつた
24	無	無
25	有	直前になって本人の意志が折れてしまつた
26	無回答	無回答
27	無	無

(3) 大学進学を勧めた事例に関する回答内容

大学等進学を希望していなかつたが、進学を勧めた事例を表4に示した。その結果、5件(No. 2, 4, 13, 17, 21 : 18.5%)と極めて少なかつた。進学を勧めた具体的な理由としては『高等教育の保障』(No. 2), 『最終学歴が高卒以上の方が就職先が広がると考えた。』(No. 4)が示された。卒業後の就職のことまでを考えて支援が行われていたことが分かつた。そのほか、「奨学金が得られた」ことを理由にした事例もあり、このように経済面の見通しが得られたことにより進学を勧めるきっかけとなつていた。また、No. 21のように、進路支援の一環として様々な大学を探し、子どもの将来像を具体化して示した事例もあつた。これらから、条件が整えば進学を実現させたいという施設職員の熱意が示された事例もあつた。

表4. 大学等進学を希望していなかったが、進学を勧めたとする回答(理由)

No.	勧めた	回 答 (理 由)	進学の有無
1	無	無回答	無回答
2	有	高等教育の保障	有
3	無	無回答	無回答
4	有	学歴を考えて(高校が特支だが能力はあり)最終学歴が高卒以上の方が就職先が広がると考えた	有
5	無	無回答	無回答
6	無	無回答	無
7	無	無回答	有
8	無	無回答	無回答
9	無	無回答	無回答
10	無回答	無回答	無回答
11	無	無回答	無
12	無回答	無回答	無回答
13	有	無回答	無
14	無	無回答	有
15	無	無回答	無回答
16	無	無回答	無回答
17	有	子ども自身の意志が固かった 日本財団の奨学金が得られた	有
18	無回答	無回答	無回答
19	無	無回答	無
20	無	無回答	無回答
21	有	何がしたいのか、まだ分からずにいたため、いろんな大学を見てみてやることをさがしてみればという思いから	有
22	無	無回答	無回答
23	無	無回答	無回答
24	無回答	無回答	無回答
25	無	無回答	無回答
26	無回答	無回答	無回答
27	無	無回答	無

(4) 大学等進学に向けた支援に関する回答内容

表5では大学等進学に向けた支援に関する回答内容を示した。具体的な支援内容(複数回答)は、「奨学金に関する支援を行った」(12件:No. 2, 6, 7, 8, 11, 12, 14, 17, 18, 19, 21, 23), 「面接などについて本人と話し合いを行った」(7件:No. 1, 2, 4, 6, 7, 19, 22), 「学習支援を行った」(7件:No. 4, 8, 14, 16, 18, 22, 27), 自立生活に向けて「生活費や学費のシミュレーションを行った」(5件:No. 4, 6, 17, 18, 25), 「本人の希望を重視した支援を行った」(4件:No. 1, 2, 10, 13), 進学資金を蓄えるために「アルバイトを勧めた」(3件:No. 21, 23, 25)が示された。その他, 少数ではあるが「職員研修に参加」, 「職員の経験を伝える」, 「保護者との連携」, 「児童相談所との連携」が述べられていた。さらに『費用が原因で(大学に)行けなくなることを防ぎたい』という施設職員の思いも綴られていた。

表5. 大学等進学に向けた具体的な支援に関する回答

No.	支 援
1	情報提供, 本人のニーズの把握, 定期的な面接, 職員研修に参加
2	本人との話し合い, 経済面の確保, 保護者との連携, 奨学金申請, 本人が判断できる判断材料を出す, 提供する
3	学力不足は本人の努力次第ですが, 出来る限りその子に合った奨学金を探して費用が原因で行けない, となるのを防ぎたい
4	進学してきちんと卒業する意志があるか。学習支援。学費等背負う金額の提示
5	保護者からの支援がまったく望めない子が多い為, 児相とも連携しながら手探り状態で様々な方法を考えている
6	本人の意思確認, 奨学金に関する情報提供, 学費, 生活費等の見直しを立てること
7	奨学金等, 助成金の情報収集と情報提供 子どもと進路面接実施
8	奨学金関係・推薦情報の収集, 本人の学力向上
9	無回答
10	基本的には本人の希望を優先しようとは考えている
11	奨学金の案内
12	オープンキャンパス等に参加, 奨学金制度について調べる, 職員らの経験を伝える
13	具体的な目標を持ち言語化していく
14	奨学金を探す。勉強できる空間を作る。一緒に調べる。未成年後見人制度を利用 奨学金がうかる様に紹介文を書く。ケースを1から調べる。
15	今のところ進学した子どもはいないため, わからない, 行っていない
16	主に学習支援を中心に行っている(20-21時に平日は学習)
17	奨学金情報の集収 生活費や学費のシミュレーション

18	大学の情報収集, 奨学金の情報収集, 学習計画, 金銭面の試算
19	進路の幅を広げていけるように対話すること, 奨学金支援
20	自立支援(定期連絡, 必要に応じて, 家庭, 学校, 職場訪問・連絡, 手続き支援など)
21	アルバイトをすすめる。奨学金のはなし等, 1年生のときから聞かせる
22	日々の家庭学習, 話をよくする
23	本人の進路選択やアルバイト等は施設で支援をお願いしている。見相は奨学金や補助金の情報収集, 措置延長の決定ぐらいしか出来ない, 一番大切なアフターケアも, 現状では施設に任せしている状況である。
24	無回答
25	進学資金を少しでも多く稼ぐことができるように, アルバイトをすすめている。どれくらい必要か具体的に伝えるようにしている
26	無回答
27	情報提供, 学習支援など

(5) 大学等進学への支援に向けた情報収集に関する回答内容

表 6 に大学等進学への支援に向けた情報収集の方法について示した。表によると、情報収集はインターネット(14 件: No, 1, 4, 5, 6, 8, 14, 15, 17, 18, 19, 20, 22, 25, 27)、説明会・研修会・オープンキャンパスへの参加(13 件: No, 1, 3, 4, 5, 8, 10, 12, 13, 17, 19, 24, 25, 27)、他施設・職員・施設退所者・学校教員との情報交換(11 件: No, 1, 3, 4, 5, 6, 8, 12, 14, 16, 19, 22)、施設に届く資料(8 件: No, 2, 3, 5, 6, 11, 15, 18, 21)であった。

多くの施設では、インターネットによる情報収集を中心に、多様な方法で進学に関する情報を収集して進学への支援を行っていることが分かった。特に、施設内に大学等進学を実現した退所者やその支援を行った施設職員の有無によって、大学等進学の情報量の違いが生じることから、他施設との情報交換を積極的に行っている施設も見受けられた。

表 6. 大学等進学への支援に向けての情報収集の方法

No.	情報収集
1	インターネット, 研修会, 詳細な情報を持っている人から聞く
2	施設に届く資料, 全養協通信, 過去の奨学金情報の見直し
3	奨学金説明会への参加, 過去施設に届いた奨学金の振り返り, 他施設の方との情報交換
4	学校HP・奨学金の情報収集, さまざまな職員から子どもに話をしてもらう
5	ネット, 施設にくる情報やこれまでの情報, 施設の先輩職員の実験の経験, 説明会や講演会
6	過去のケース記録や資料, インターネットなど
7	無回答
8	インターネット, 説明会, 昨年度までの情報を踏まえて
9	無回答
10	基本的には本人に任せているが, オープンキャンパスや説明会などについては詳しく話を聞くようにしている
11	施設に届く情報から調べる
12	研修会, 他施設職員と情報交換
13	説明会等に参加
14	施設長からの情報, ネットで調べる, 卒苑生からの情報
15	ネットや, 送付される資料等, はじめての進学希望者のため, どんなことから始めたらよいかわからない
16	各々, 職員間で情報共有を図り, 情報を収集している
17	ネットの利用 今回の説明文
18	インターネットを通じて資料を取り寄せる
19	インターネット, NPOの説明会, 友人
20	インターネット(全社協などの情報を基に)
21	資料を請求する
22	インターネット, 子どもの担任の先生との懇談
23	無回答
24	大学進学説明会や奨学金の説明会に参加する
25	インターネットの情報や研修などに参加する
26	無回答
27	こういった会に参加する, インターネットで検索する

5. 考察

以上の結果から考えられることとして、以下の 3 点を指摘したい。

第 1 に、児童養護施設における大学等進学に関する支援の主な課題は、「学費・生活費の確保」、「進学に対する本人の意識づけや意欲の維持」、「学習支援」の 3 点であると言える。この 3 点は、それぞれ独立した課題でなく、相互に関連している。これらの課題の解

決は条件が整えば実現のスパイラルへとなり、整わなければ実現不可のスパイラルへと移行するとみられる。したがって、この3点のいずれか1つが欠けても大学等進学は実現しえない要素であると考ええる。

第2に、大学等進学が実現不可のスパイラルへと移行を止めるためには、義務教育を含む中等教育の期間に「進路に対する本人の意識づけや意欲の維持」および「学習支援」を適切に行い、進学の基盤を福祉と教育との連携のもとに取り組むことが望まれる。さらに、いずれの施設であっても奨学金制度の情報が等しく入手・活用できる仕組み作りが急務であるといえる。そのひとつとして令和2年4月から高等教育の修学支援新制度が始まった。この制度が社会的養護下にいる子どもたちの大学等進学を後押しすることになる制度となり得るかどうか注視したい。

第3に、大学等進学に対する施設間の格差が生じる要因の一つに、情報収集の方法の差が関係しているのではないかと予測したが、表2と表6における進学者数と情報収集の方法を比較しても大きな特徴は見られなかった。施設によっては進学希望者に対して多様な方法で情報を入手して進学支援に取り組んでいる積極的な姿勢や努力がうかがわれた。こうした姿勢や努力が多く施設へ波及することが望ましい。

最後に、施設職員の全てが大学等進学を積極的に進めている現状ではないが、実際は大学等への進学は施設の子どもの気持ちに寄り添いながら本人の思いを汲み取り、本人の将来を考えて大学等への進学を勧めている施設職員の熱意と努力に支えられていると言える。

文献

早川悟司(2013)「児童養護施設における自立支援の標準化—東京都「自立支援強化事業」を通じて」『子どもの福祉』6, 8-15.

付記

本報告は日本学術振興会科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究(課題番号:JP16K13452)「児童養護施設退所者の後期高等教育の進路の保障」の成果の一部である。